國學院大學

家庭や地域との連携による道徳教育

学習指導要領「第3章　特別の教科　道徳」第3「指導計画の作成と内容の取扱い」
2－(7)道徳科の授業を公開したり、授業の実施や地域教材の開発や活用などに家庭や地域の人々、各分野の専門家等の積極的な参加や協力を得たりするなど、家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図ること。

キーワード：❤道徳科についての共有
（ブラックボックスからの可視化と理解の共有）
❤地域の道徳的実相（子供の道徳的実態・環境）を踏まえた道徳教育の推進
❤子供の日常的道徳生活に根ざした道徳科実践方法とその学習評価

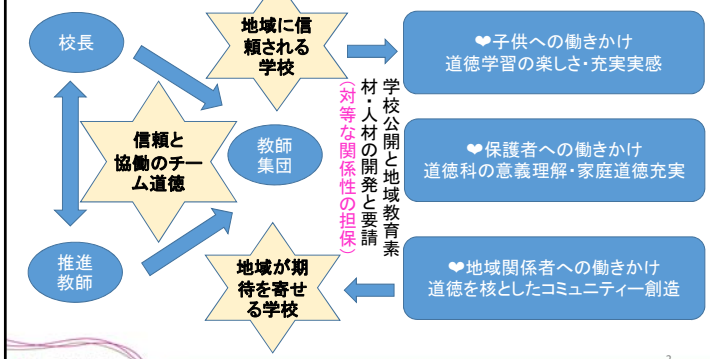
①道徳科の的確な理解、②道徳科の的確な運用、③道徳科を介した学校家庭地域連携

國學院大學人間開発学部　田沼茂紀

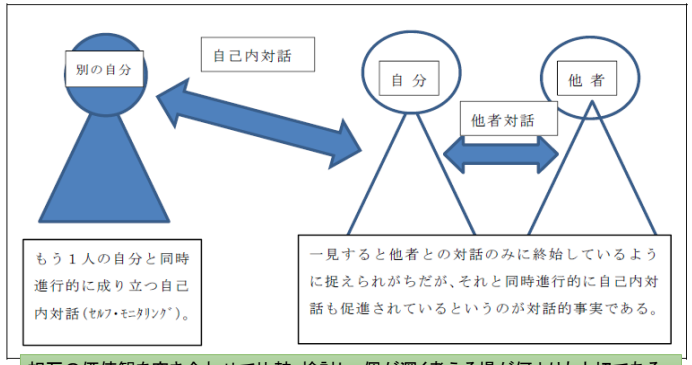
各学校の道徳教育充実は、リーダーシップを発揮する校長の指導力と道徳教育推進教師の企画力に尽きる。

❤「道徳」を中核に、子供、教師、保護者、地域が情報交流することの重要性

ブラックボックスな道徳科授業をまず開こう！



学校における道徳教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者とよりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする。
（小学校学習指導要領解説「特別の教科　道徳編」p10　第2章「道徳教育の目標」より）



相互の価値観を突き合わせて比較・検討し、個が深く考える場が何よりも大切である。

なぜ今、道徳科授業としての指導実効性が求められるのか？

《問題提起:子供を取り巻く社会状況変化への対応が喫緊課題》

道徳の時間から道徳科に移行してもその指導の在り方は同じか？

◇道徳科のねらい達成は、「学習活動と学習内容」がセットで可能。

◇道徳科で目指す「価値理解」と「価値自覚」とは、教育課程全体の中で相互連環的に汎用的な実践力を伴って実現される。

《道徳科で目指すべきもの》

ならば、道徳科授業では何を意図的に学習することを目指すのか？

★道徳科授業で大切なことは、自らが善く生きるために前提となる道徳的価値について①きちんと理解（共有し合える共通解）し、その理解にたって②道徳的価値を自分事として受け止めながら、その理解に基づく個人的な道徳的運用（個の納得解）を考えることである。

道徳科授業に求められるニーズを満たす必然として多様な授業展開と多面的・多角的な道徳的思考の実現が必須!!

◆心情重視型から論理的思考型道徳科授業へ

資質・能力	資質　能力の柱となる構成要素	道徳的資質・能力形成との関連性
知識・技能	何を理解しているか、何ができるか。	道徳的諸価値についての理解を基に、
思考力・判断力・表現力等	理解していること・できることをどう使うか。	自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、
学びに向かう力、人間性等	どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか。	自己（人間としての）の生き方についての考えを深める。

道徳科の「目標」実現への方法論

道徳的な見方・感じ方・考え方

道徳的課題解決

見方・感じ方・考え方を裏付ける事実 ⇔ 見方・感じ方・考え方を支える理由付け

道徳教育の「要」である道徳科授業の進め方をどう共有し合うのか？

《本提案の前提》
「いきなり教師の範読で授業が進む。読解力や記憶力の優れた子供ならともかく、普通の能力の子供では内容を十分に理解することは難しいだろう。いくら発問や指導法の工夫を色々研究しても、学んだことが子供の記憶にすら残らなければ学習したことにはならない。道徳が教科化されても従来の授業展開では、成果は期待できない。」（出典：竹内善一　日本道徳教育学会報　第47号「学会ノート」後段より）

ならば、子供の心に楔を打ち込むような（心に響く）道徳科授業を創るにはどうすればよいのか。

これまでよく散見された道徳授業	これから目指したい道徳科授業
① 子供が受け身の道徳授業	① 子供が主体的に学ぶ道徳科授業
② 教師が主題のねらいに沿って予め構成した発問の正解を探し求める道徳授業	② 子供自身が切実感をもって共通解や納得解を自ら見出す道徳科授業
③ 教材中の事柄のみを読み取る道徳授業	③ 子供が自分事として考え、議論する道徳科授業

《教師主導の道徳授業から学習者中心の能動的な道徳科授業へ》

道徳科授業展開で想定される大まかな指導類型パターン
（2016.7.22「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議報告書」より）

①パターン《教材中人物への自我関与中心の道徳学習》情意的側面
◎教材中の登場人物に託して自らの道徳的な考え方や気持ちを素直に語り合う中で、道徳的な価値理解を深める定番パターン。

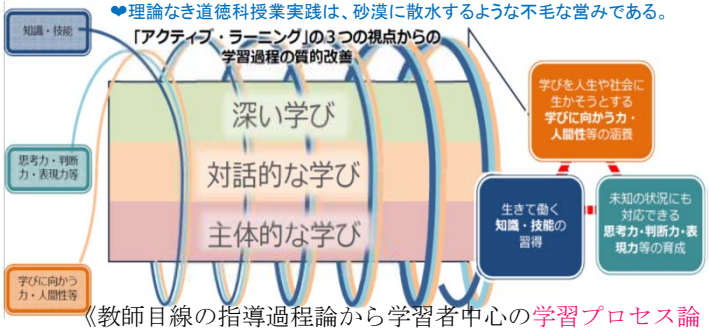
②パターン《問題解決的な道徳学習》認知的側面
◎出会った道徳的な問題に対処しようとする資質・能力を養うことを意図する道徳学習パターン。

③パターン《道徳的行為に関する体験的な道徳学習》行動的側面
◎心情と行為とを摺り合わせることにより無意識の行為を意識化することができる点に気づかせ、様々な課題や道徳的問題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う道徳学習パターン。

いじめに正面から向き合う「考え、議論する道徳へ」への転換に向けて（2016.11.18松野談話）
◇人物の気持ちの読み取りに終わらない。 ◇決まりきったことを言わせたり、書かせたりで終わらない。 ⇒具体的な問題を自分事として考え、語り合って（議論）学んでいくことが大切！

主体的な学びへ授業改善する視点⇒教科教育型の課題探求型道徳科へ転換
深い学び＝習得・活用・探求プロセスで、課題発見と解決を前提にした学びへ転換。
対話的な学び＝「道徳的課題追求」という他者との協同思考を通じて自らの考えを拡げ、深める道徳学習プロセス論を前提に授業構想する。
主体的な学び＝道徳的課題解決への見通しをもって粘り強く取り組み、その学習過程を省察しながら次なる課題へと発展できる学びのスパイラル。

❤理論なき道徳科授業実践は、砂漠に散水するような不毛な営みである。



《教師目線の指導過程論から学習者中心の学習プロセス論へ》

道徳科教育学は道徳教育内容学と道徳教育方法学で成立する

道徳科で一人一人の子供が主体的に学んでいる姿とは？

- 教材中の人物の生き方に自我関与している
- 教材中の道徳的問題を自分事として受け止めている
- 普段の自分の道徳生活（善くも悪くも）に重ね合わせて問題を考えている
- 自分のこれからの道徳生活の姿をイメージしながら、望ましい問題解決の在り方を考えている

道徳学びの中で、いつも**「もし自分がこの人物の立場だったらどうするだろうか・・・」**と自分に引き比べて考えることができることが大切。だからこそ、**「客観的に多面的・多角的に思考・判断・表現（頭で分かっても実際は・・・）する」**ことが大切なのである。

論理的思考で大切なことは、自らを客観的に対象化できることである。

子供が多面的・多角的に学ぶ姿とは？

❤道徳的問題中の価値とのかかわりの中で多様の視点・立場で思考したり、判断したり、表現（書いたり、演じたり、発表したり等）したりして、自分との間接性をもって学んでいる。

★「もどれ、もどれ」と橋の上でいじわるするおおかみの言動

❤道徳的問題中に対する三角ロジック思考（主張（CLAIM）、事実（DATA）、理由づけ（WARRANT））が機能している。

★「ほら、こうすればいいのさ」と問題解決するくまの共生的な言動

❤道徳的問題をしっかりと認知し、客観的に思考・判断・表現する過程で情意的深化や行動的実践イメージが確実に育まれている。

★「えへん、へん。」おおかみは、まえよりずっといい気持ちになりました。

❤学び手の個別的な発達の段階に即して、弱さやずるさと同時に併せもっている強さ、健気さ、気高さといった人間の生き方の素晴らしさに気付いている。

★おおかみは、橋の上に立っていました。くまの後ろ姿をみながら、いつまでも・・・。（中略）「それには及ばないよ。ほら、こうすればいいのさ」、「これに限るぞ」、おおかみは、気持ちが晴れ晴れとしました。

道徳科の指導で最も大切にすべきは、子供の「道徳学習課題意識」

道徳科授業では、

道徳教材という共通の道徳的追体験を基に、主体的かつ対話的に道徳的価値の実現に向けて深い学びをすることを目指す。

つまり、道徳科授業で大切なのは、

①道徳科授業では価値理解のみに留まらず、子供の主体的な価値観創造が実現できる時間にする。

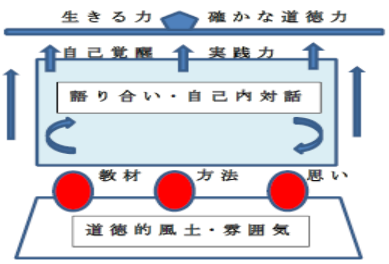
②学習指導要領の内容項目を教えるのではなく、その先にある個別な道徳課題への気付きを促すようにする。

③子供がこれから未来に生きる「明日の望ましい自分の姿」を具体的にイメージできるようにする。

④子供の「頭が働き、心が動く」課題探求型の道徳科授業を意識する。認知側面から情意側面、行動側面へ

★ポイント：共通解の獲得から納得解の形成へ

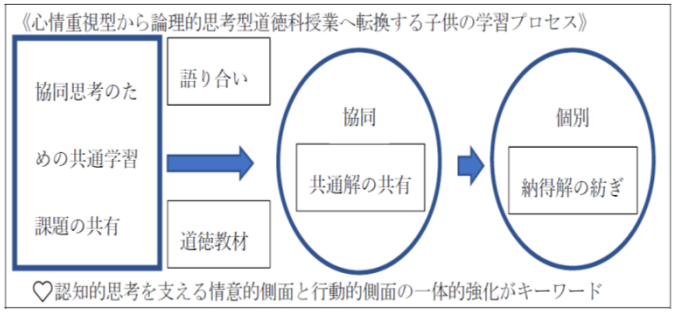
子供の豊かな道徳性形成を実現する課題探求型道徳科授業の構成要素



子供は、道徳的学習課題を探求するための「語り合い（他者対話）」という協同学習プロセスを通してスキルを培いながら同時に「自己内対話」を繰り返し、さらに繰り返し（対流）ながら、自らの道徳性を拡げ・深め、自らの道徳的価値観（ものの見方、感じ方、考え方）を形成していく。

- 校内道徳教育推進体制
  家庭・地域との連携体制
- 道徳教育全体計画
  道徳年間指導計画
- 各教科等での道徳教育
  体験・実践活動の連携

語り合い（他者対話）と自己省察（自己内対話）の往還で
「共通解の獲得」と「納得解の形成（紡ぎ）」を目指す！



大切なのは、子供一人一人にとっての切実な道徳的課題意識である。個の課題探求意識がなければ、主体的・対話的で深い道徳学びなど生まれないし、道徳学びの評価をすることも不可能である。

課題探求型道徳科授業の基本フレームを考える

これからの「主体的・対話的で深い道徳的学び」形成プロセス

［学習テーマを理解する］ ←①学びを方向付ける

↓ ★課題を知り、関与するためのスキル

［追求する学習課題を設定する］←②深化への課題をもつ

↓ ★共通課題へとつなげるためのスキル

［教材での学びから共通解を導き出す］←③価値の多面的な理解

↓ ★多様に課題追求して共通項を見出すためのスキル

［共通解を基に個別な納得解を紡ぎ出す］←④個の価値観創造

↓ ★自らの道徳的問題として体現するためのスキル

［納得解実践化への新たな課題をもつ］←⑤実践イメージの喚起

★望ましさを生活に敷衍し、継続していくためのスキル

極めるための「探究」ではなく、望ましさを探し求める「探求」が大切!!

学習テーマ⇒学習課題⇒共通解⇒納得解と展開するために！
まずは、「ねらい」を大切にしよう！

♥本時のねらいを4要素を適切に配置して設定する。

①展開する学習活動の視点から

例：手品師の心の動きを考える活動を通して、

例：広子の心の迷いの訳を考える活動を通して、

②取り上げる学習内容の視点から

例：自分に対して正直であることの大切さに気付き、

例：友達とのよりよい関係を築くことの大切さに気付き、

③そこで目指す道徳的価値の視点から

例：いつも明るく誠実な心で生活しようとする

例：互いに信頼し、助け合おうとする

④具体的な実践として目指すべき姿の視点から

例：態度を育む。

例：心情を育む。

＊ピンク字は教材「手品師」 正直・誠実、青字は教材「絵はがきと切手」小中学年 友情・信頼

学習テーマ⇒学習課題⇒共通解⇒納得解の学習とするために！

❤ねらい達成に向けてその時間を貫く協同思考活動が可能な「道徳学習課題」を設定する。

①テーマに沿って子供の道徳生活から、道徳教材から。

例：正直・誠実な生活実態⇔チャンスを断る手品師の生き方

②教材中の場面から、人物の心の動きから、登場人物の対比から。

例：男の子を励ます場面⇔何も知らない子に手品を見せる場面
いつか大劇場の舞台に・・・⇔一人のお客を前に演ずる手品師
このチャンスを逃したら・・・⇔君の友情に対して済まないと思うが

③主題中に内在する複数の道徳的価値の検討から。

例：教材「手品師」に内在する道徳的価値
正直・誠実VS希望・勇気・強い意志　思いやりVS向上心・個性伸長

◆学習課題探求で大切なことは、授業内の学習活動と学習内容が常にセットで構成されていることである。

例：他者対話としてのペアトーク、全体ディスカッション⇔先約を優先して大劇場を断った手品師の気持ち。
他者対話としての役割演技⇔せっかく誘ってくれた友人に「」明日は行けない」ときっぱり断る手品師。
自己内対話としての語り合い⇔男の子を前に手品師はどんなことを考えながら演じているのかな？

道徳科学習指導案を子供主体の学習プロセス案へ転換するための本時展開案

第　学年　組　道徳科学習指導案（略案）

指導者

1．主題名：　　内容項目　－（　）「　　」
2．教材名：　　出典「　　」
3．ねらい：
4．展　開：

段階	学習活動	主な発問と予想される子供の反応	指導上の留意事項
導入	1．テーマを知らせ、本時の方向付けをする。		
展開	2．本活動後の教材から課題設定し、教材を通して課題追求する。	【学習課題】	
	3．主題についての共通解を確認する。		
	4．個の価値観としての発展解を個別に続かせる。		
終末	5．本日のまとめをする。		

①道徳科での評価は道徳性評価ではなく、道徳科での学び評価である。

②道徳科での学び評価の裏返しは、つまり道徳科の指導評価でもある。

③道徳科での学び評価を確かなポートフォリオ評価にしていくためには、一貫した課題探求学習を継続展開することでしか実現しない。

④子供の道徳的学びを評価していく前提は、どのような具体的な姿としての資質・能力を計画的・発展的に育むのかという観点が不可欠である。

⑤いくらよい評価でも、子供が納得しないとその意味を持たない。

通知表に記述すべき想定される内容

【小学校】事例「ブラッドレーのせい求書」

ねらいとする価値を念頭にした例	たとえ家族でも、相手の気持ちを考え、自分も協力しようとする思いやりが大切であることに気づいていました。（50文字）
学習中の学びに着目した例	教材中に登場する人物の気持ちを感じ取ったり、友達の意見に耳を傾けたりして家族の大切さを学んでいました。（50文字）

【中学校】事例「銀色のシャープペンシル」

ねらいとする価値を念頭にした例	僕の自分自身をごまかさない生き方を通して、誠実に他者と接することの大切さを改めて確認していました。（50文字）
学習中の学びに着目した例	不誠実な自分について悩み、改めようとする僕の気持ちの変化を友達と語らい、その考えを全体で発表しました。（50文字）

田沼茂紀・著『道徳科授業のつくり方　パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価』より

自校の道徳科年間指導計画を「入れ子構造」で構想する

年間35時間の大単元を中単元⇒小単元と意図的・計画的に具体化する

第〇学年　道徳科年間指導計画（35時間配当）
大単元テーマ：自分・他者・社会との関わりを見つめよう
重点指導内容：【善悪の判断，自立，自由と責任】【相互理解・寛容】

3学期：中単元〔3rd.season〕	2学期：中単元〔2nd.season〕	1学期：中単元〔1st.season〕
育ちゆく自分を見つめよう	集団社会との関わりを広く見つめよう	自分と他者との関わりを見つめよう
小単元配置（複数時間扱） ・キャリアを育む自分 ・自他の尊い生命を守る ★一主題一単位時間授業も適宜意図的に配当する。	小単元配置（複数時間扱） ・権利と義務を考えよう ・支え合える社会の実現 ★一主題一単位時間授業も適宜意図的に配当する。	小単元配置（複数時間扱） ・いじめについて考えよう ・SNSを問い直そう ★一主題一単位時間授業も適宜意図的に配当する。

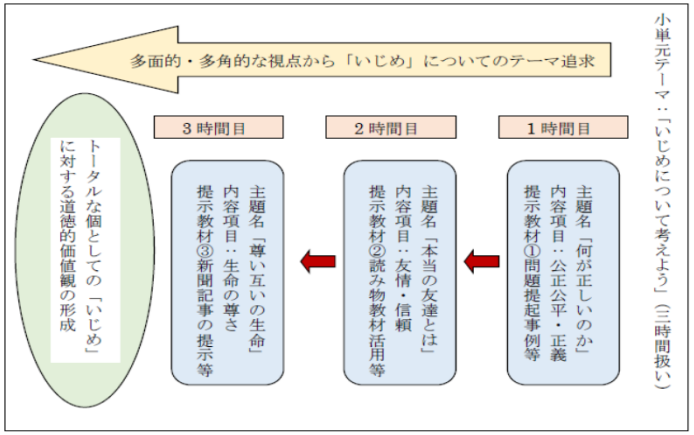
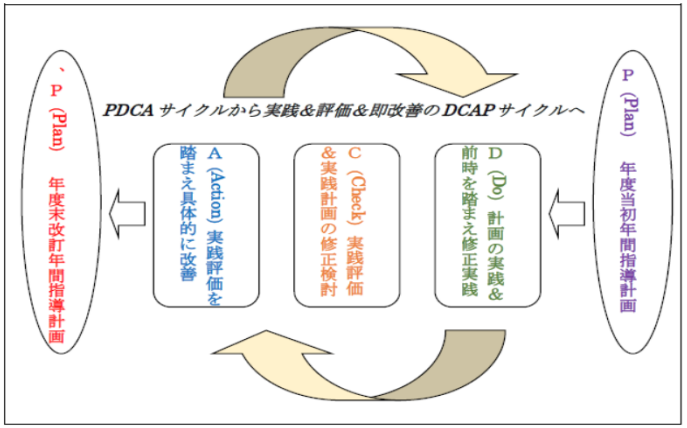
パッケージ型ユニットで道徳科授業の実効性を高める

パターン①　テーマに即して同一価値内容を複数時間ユニットとして組む
テーマ例：かけがえのない生命を見つめよう
（1時間目）生命の尊さ → （2時間目）生命の尊さ

パターン②　テーマに即して異なる価値内容を組み合わせて複数時間ユニットを組む
テーマ例：いじめについて考えよう
（1時間目）公正公平・社会正義 → （2時間目）友情・信頼 → （3時間目）生命の尊さ

パターン③　中心になるテーマを他の価値内容で補強してユニットを組む
テーマ例：社会の一員としての役割を知ろう
（1時間目）社会参画と公共心 → （2時間目）個性の伸長 → （3時間目）希望と勇気 → （4時間目）よりよく生きる喜び

設定テーマに沿って各内容項目を有機的に関連付けて配列し、課題探求型道徳科授業にして子供一人一人の道徳的学びに意味を持たせる!!



これから「特別の教科　道徳」で求められるのは、 教科型教育としての課題探求型道徳科授業でのリアルタイムなカリキュラム・マネジメントである。